

2

『黄素妙論養生訓』について

永塚 憲治

公益財団法人 研医会

『黄素妙論』は、明の嘉靖十五年の刊記を持つ房中書の『素女妙論』を初代・曲直瀬道三が和語に抄訳したもので、本朝の艶本の魁の一つとされ、長澤規矩也の研究（『図書学参考図録』解説 汲古書院1979年 p.5~7）に依れば、以下の五種類の版種を挙げる。1. 江戸初期刊本 大一冊 2. 江戸前期京都長嶋与三覆刻本 大一冊（国立国会図書館（W411）蔵・天理大学附属天理図書館（四九九一イ一三）蔵・都立中央図書館 加賀文庫（3322）蔵） 3. 江戸前期刊本 大一冊 4. 江戸末期刊本 中一冊（京都大学附属図書館 富士川文庫（コ/167）蔵・天理大学附属天理図書館（四九九一イ三）蔵・関西大学図書館 長澤文庫（L.23/C6370）蔵） 5. 江戸末期敏求館覆刻本（関西大学図書館 長澤文庫（L.23/C6326）蔵） 小一冊。このように江戸時代を通じて、刊行がなされていたことが分かるが、混同されやすい4と5の区分に関して、長澤は、「第二十三葉の第二行の「行」字に送仮名がない」ものを江戸末期敏求館覆刻本としている。

石上阿希 第二章 中国養生書と艶本—『黄素妙論』の受容を中心に—『日本の春画・艶本研究』平凡社 2015年（55-89頁）の63頁に依れば、更にもう一種（公益財団法人武田科学振興財財団杏雨書屋（研3675）・公益財団法人研医会 研医会図書館蔵）を報告している。石上論文では、江戸末期刊本・敏求館覆刻本とそれと類似した杏雨書屋所蔵本や研医会所蔵本の区分の仕方について触れていないので、それについていうと、長澤がいう江戸末期刊本・敏求館覆刻本は、本文第一葉二行目の行頭を「の聖人……」に作るが、杏雨書屋所蔵本・研医会所蔵本は「聖人……」に作っており、それによって区分が出来る。但し、「敏求館覆刻本及び杏雨書屋所蔵本・研医会所蔵本も本文第二十三葉の第二行の「行」字に送仮名がない」点には、注意すべき点である。

今回は、石上論文においても、実物を見ることが出来なかったとされる『黄素妙論養生訓』を二点入手・発見したので、報告する。まず第一種目の『黄素妙論養生訓』（以下、A版と呼称する）は、題箋に「黄素妙論養生訓 上」とあり、残念ながら上のみ一冊の端本で、首に「古来、和気丹波の両家本朝の名医たる……」とする「黄素妙論養生訓の序」が二葉、「巻中目録 凡十三箇条」が半葉、続けて「美人春心起立」（びじんおもひおもひのあたごころをおこす）と題する見開きの図、更に続けて「和解人の養生ハ陰陽和合を基とすべし……」とする「養生訓の要」が二葉半有り、「黄素妙論 雖知苦齋 道三著」と題して以下本文十六葉が有る。

次に第二種目の『黄素妙論養生訓』（以下、B版と呼称する）は、題箋が上部のみで欠けており、首に「養生訓の序」（A版にあった「黄素妙論」は削り取られている）が二葉、「巻中目録 凡十三箇条」が半葉、続けて「美人春心起立」（びじんおもひおもひのあたごころをおこす）と題する見開きの図、更に続けて「養生訓の要」が二葉半有り、以下十六葉の図が有り、次に本文が続くが、最初からではなく「巻中目録」では「九勢の要術」に当たるとされる体位の解説の七葉だけが有り、書末に「黄素妙論終」と刻されている。

A版とB版を比較した所、B版の本文の第一葉と末の第七葉は新たに版木を彫り直したもので、中間の五葉は同じ版木を使用していることが分かった。「美人春心起立」（びじんおもひおもひのあたごころをおこす）と題する見開きの図及び葉次に「十葉」と有る葉の裏葉の末行の行頭の変体仮名「越」の字の掠れと匡郭の割れから、B版よりA版の方が早刷りだと分かる。またこのA版及びB版のA版との共通の五葉は、長澤がいう4. 江戸末期刊本と同種の版木を使っていることが明らかになった。